学術知とは
―「学問」と「研究」の関係―

宮野　公樹

1　「問う」雑誌の創刊

『TOI TOU TOI（問い問う問い）』という学術誌の試刊から、もう五年になる[1]。これは、学際研究は発表する場がないから進展しないという言い訳を我が国から無くすため、それならどの分野でも投稿できる学術誌を京都大学が作ろうではないか、という気概から生まれた（資金は京都大学の寄付金を使用）。

本誌の「学会誌ではできないこと、やりにくいことをやる」というコンセプトと非常に近く、きっとご関心頂けると思うので、まずこの『TOI TOU TOI』を少し紹介させて欲しい。以下は、その三つの特徴である。

◆分野を限定しない「学問」の論文誌

それが学際的であろうがなかろうが、またどのような学術分野であろうが、「本質」というものは変わるものではありません（場面によって変わってしまうようなものは本質とは呼べません）。掲載基準としての指針は、「どのような分野、どのような方法、どのような営みであれ、あなた（たち）が考える本質とは何で、その本質をおさえようと考え尽くした深さが如何ほどのものか」です。

◆「発表」の場ではなく「対話・研鑽」の場

本論文誌にはいわゆる（ブラックボックス的な）査読はありません。それよりも厳しいであろう編集者（様々な分野からなる八名の研究者）との「対話」があります。しかも、執筆者と編集者とのやり取りも誌面およびアーカイブにて掲載します。

◆新しい学問の表現への挑戦

形式を重んじつつも同時にそれを疑うのが学問精神の構え。「論文」という表現形式を問い直し、言葉（数式、実験や調査データを含む）だけでなく、言葉で伝えられないもの（写真等アートで表現されるもの）を無視しない学問の在り方を、この新しい論文誌制作を通じて探求します。ビジュアルとテキストが響きあって表現を拡張させ、読み手に再解釈を迫るような余地を保持し、論文の表現としての可能性を広げる挑戦です。

このような思想のもと、第一号を作ってみた次第である（第二号は未定）。多大な資金と手間がかかったが、五年たっても未だに「次号はまだか」といった問い合わせがあり、編集側が言うのも何だが、伝説の論文誌となっている。

すべての原稿は無料でダウンロード可能だがそれはテキストのみ。原本は今のところＥＣサイトで購入もできるので、できれば一度現物を手にとって頂きたい。

触れた瞬間わかる学術誌としてありえない質感。著名フォトグラファーの写真が多数差し込まれ、凶暴なぐらい読み手の感性を揺さぶりにかかる。各論文の言葉も練りに練られ、論

文なのか、エッセーなのかよくわからないものとなっており、まさに「作品」に近い。

2　学問は創作である

思うに、「学問」はこちらのほうである。つまり「作品」や「創作」といった類がその本来のあり様なのだろう。「研究」は調べたことを書くが（解釈、または説明）、「学問」は生み出したものを描く（作品、または創造）。さらに換言するなら、研究は対象を理解しようとし、学問は己の感慨を伝えようとする。

これは古典と呼ばれる書物を読めば一目瞭然である。対話式記述のプラトンの作品は言うまでもなく、ヘーゲルや西田幾多郎を読んだ後の、著者本人と向き合ったような、あのずっしりとした読後感。何かを「得た」というより「感じた」または「誰かと出会った」に近しい感覚を得るのは私だけではないと思う。これは何もいわゆる文系に限らない。『ユークリッド原論』（紀元前三世紀）もおそらくそうだろう。「論文」や「学術書」を読んだ感じとはどこか異なる。

もちろんこれは、「研究」や「論文」を否定するものではない。仮説をもとに調査や実験に

よって得られた事実から、その範囲内における「正しさ」や「確からしさ」を追求し結論づける。その営みの堆積があって、学術界が成り立っているのは言うまでもない。それらのおかげで、例えば、宇宙の謎の解像度はより詳細となって人々を魅了し、また、時代も場所も越えた過去の偉人たちの言葉を誤解や誤読なく安心して母国語で読むことができているのだ。

3　学問と研究の境界

読んでの通り、私は「学問」と「研究」を明確に分けるのであるが、世間では、そして学術界でも、それらの境界は曖昧である。例えば、「専門分野」を伝える単語として、「学問分野」、「学術分野」、「研究分野」が用いられ、その時々の文脈や雰囲気で使い分けられている。

文科省のとあるＷｅｂサイトには、「新しい学問の発展や新しい研究領域の展開」という項目があるが、もはや意味するところがよくわからない。なぜこのように「学問」と「研究」は混同され、曖昧な使用になっているのか。

何のことはない。その理由は、曖昧でも困らないから、である。しかし、私にはこの言葉の軽視が、しかも、事もあろうか「学問」と「研究」という最重要用語を軽んじてしまって

いる点が、今日の学術界が有する諸課題の遠因だと思う。

試みに、その辺りを歩く研究者をつかまえて「あなたの研究を紹介してください」と尋ねれば、嬉々として語るだろう。その後、続いて、「では、あなたの研究の学問性について話してください」となると、一瞬固まる（ような気がする）。あるいは、もっと直接的に「学問とは何だと思いますか？」と聞いてみるのはどうだろう。一瞬、何を答えればいいかわからない気がするのは私だけだろうか。

これらはあくまで個人的かつ偏見的妄想に過ぎないが、今日、我々研究者は「学問」を忘れてしまったような気がしてしかたがない。ノーベリストの野依良治氏も、とある講演にて「今日、研究者は沢山いるが、学者は少ない」と言ったと聞く。

改めてなぜこれらが問題なのかと問われるなら、それは、大学は社会において唯一「学問」をすることを許された組織であるにも関わらず、大学がその「学問」を忘れている（ように感じる）からだ[2]。大学は「学問」をしなければならないのだ。

4　学問と学者

では、改めて「学問」とは何か、「学者」とは何か。

先に述べたように、「研究は調べたことを書くが（解釈、または説明）、学問は生み出したものを描く（作品、または創造）」としたが、近年話題の生成ＡＩはどう定義するか。実際に聞いてみたところ、ＧＰＴ先生はものの一秒で次のように答えた。

「学問」とは、単に既存の知識を整理し、解説するだけではなく、新たな視点や理論、価値観を生み出し、世の中に提示する創造的な営みである。それは、未知の領域に踏み込み、混沌とした事象の中から秩序や意味を見出し、それを体系化するプロセスだ。この点で、学問は単なる情報の蓄積や分析を超え、人間の理解を拡張し、時に文明の進歩を促す力を持つ。一方、「学者」とは、この学問の精神を体現する存在である。学者は、好奇心と探求心を原動力に、既存の枠組みに囚われず、独自の視点で真理を追求する者だ。彼らは、単に知識を消費するのではなく、新たな知識や洞察を「描く」ことで、社会や文化に貢献するものである。

しかし、私はこれに全く同意しない。ＧＰＴ先生は「学問」を何もわかっていない。なる

ほど、既存の諸辞典を紐解けば、研究は個別対象の深堀りで、学問はその体系化、という雰囲気で語られるのを多数見受けられるが、おそらく、そのようなテキストデータを食っているからＧＴＰ先生はこのように答えるのだろう。

何が同意できないかと言えば、「(学問とは) 混沌とした事象の中から秩序や意味を見出し、それを体系化」という点。私にしてみれば、これは現代科学の匂いが強すぎてとても受け入れることができない。混沌とした事象から秩序や意味を見出すなど、まるで混沌が悪いみたいではないか。

いずれ死すべき人間が何をどうしようが混沌は混沌としてただ在るという単なる事実、そのような根源において現実を見ることこそが学問であるのに（ヤスパース、一九五四）、この混沌への受諾を匂わせない記述は学問とは言えない。そして次なる「体系化」、これも大きく違う。学問においては、体系化は結果であって目的ではない。

例えば、これはヘーゲルの『大論理学』に顕著である。かの書は「すべて」を概念の対象とし書き尽くした結果なのであって、体系化しようと思ってしたわけではない。確かに、ディドロ、ダランベールらによる『百科全書』（一七世紀）の二〇年にわたる出版活動を見れば、学問とは体系化、と言いたくなる気持ちもわかる。

ただ、それが学問であるなら、その体系化こそを疑うはずである。例えば、体系化したら何なのか、と。「カテゴライズする」ことは、何が「分かった」ことなのか、と。

他にも、「世の中に提示する創造的な営み」、「文明の進歩を促す力を持つ」「社会や文化に貢献する」の箇所に同意できない。学問はこのようなキラキラした未来志向や将来思考でもなく、前向きで建設的なマインドでもない。言葉を有してしまった人間がやむにやまれずするものが「学問」である。注意深くも、先に「学問は己の感慨を伝えようとする」と書いたが、まさにこれだ。感動でもなければ思想でもない、感慨である。「このように考えてしまった……」といったような。

もう一度ヘーゲルを挙げるなら、絶対精神と化した自己において、言葉にならぬ言葉を紡いだ結果において、もはや進歩や進展は全歴史のもとに相対化され、その認識こそ重要であれ、前向きな社会貢献などは問題になろうはずもない。

何も西洋かぶれなわけではない。梵我一如他、余興的になるが、ヘーゲルに対抗して西田の絶対無を持ち出してもよい。その道の研究者らは、言葉の定義やらについてきっとあれこれ言うだろうが、達した当の本人たちにとってはどれも同じことで、共にあの世で笑い合っているに決まっている。

5　大学と学問

大学がこのような「学問」を忘れたなら、少々現代社会に役に立つことは出来ても、例えば、人生を一瞬で変えうるような感動を与える仕事はできまい。研究は手段かもしれないが、学問はそうではないのだ。大学が研究ばかりになると、企業体と比較され、コスパ、タイパで評価されるようになる。そして、事実、今そうなっている。

いったい、学問本来の「生ける知識」の中身がいつから「役立つ知識」となったのかは、ここでは省くが、大学は「役立つ」こと（強いて言うなら「研究」）をやってはいけないと言いたいのではなく、例えば「役立つとは何か」という問いと併せ持たないと（強いて言うなら、これが「学問」）、研究のための研究となってしまう、と言いたいのである。

ある仮説をもとに、限られた範囲内で、厳格な手法の下、確からしいことを主張する研究という営みにおいて、そもそもなぜその研究をするのかという全体から見た意味性、加えて、なぜそのような問いを人類は持ったのかという歴史性、これらを決して欠いてはいけない。

個別具体な研究という営みが、学問となるのは総体への希求、この一点である。研究は無数にあるが学問は一つなのだ。何をしようとして何をし、そしてそれは、何をしていること

になるのか……。大学は、三木清の言う「学問の研究」をしなければならない、それがどのような分野であれ[3]。

6　「学術知」の復興

このような思いを具現したく、冒頭紹介した分野不問の論文誌『TOI TOU TOI』を作ったわけだが、それは「学術知」の復興と言っていい。残念ながら、今日使用されるこの「学術知」という言葉は、例えば、実践知や経験知といった実用的な知識に対峙するものとして使用されており、「生ける知識」という本来的な意味での「学術知」の狭義となっている。これでは、まるで学術知に実践的、経験的な意味合いが含まれてないように思えるではないか。

本誌特集の「学術雑誌を考える」は、改めてこの「学術知」とは何か、それを記述する雑誌または論文とは何かと、問い直す貴重な機会と思う。

注

1　『TOI TOU TOI』https://www.cpier.kyoto-u.ac.jp/project/toitoutoi/（二〇二五年六月三〇日アクセス）。

2　と書いたが、実のところこれは正確ではない。我が国において大学が誕生した大きな理由は国家強化に資するためであった。一八八六（明治一九）年の帝国大学令第一条「帝国大学ハ国家ノ須要ニ応スル学術技芸ヲ教授シ及其蘊奥ヲ攷究スルヲ以テ目的トス」（著者意訳：帝国大学は、国家の必要に応じた学術や技術を教え、それに関わる研究を行うことを目的とする）。これは、日本の近代国家への発展に向け、教育機関としての東京大学並びに開成学校から、国家の要請に応える人材を育成する帝国大学へと制度的に大変革した結果だった。ただ、このような経緯があるにせよ、本来の「大学（学問）精神」はそれなりに大学人を通じて生き続けており、今日、あらゆる大学入学式の総長式辞を調べれば、大学は学問をするところであるという通念が多く確認できる。

3　ここまで書くと、筆者の言う「学問」は「哲学」のことではないか、と感じられるかもしれない。これは、その通りとも言えるし、そうでないとも言える。今日、他の分野と同様に、哲学もまた過度に専門化したことを危惧しているため、ここではっきりと「哲学」とは書けないのである。加えて、今日、一般的に「哲学」というと偉人たちから学ぶこととされがちで、その本来である「考える」を考える」ことであると伝わりにくい。これらの理由により、「学問」という言葉を使用している次第である。

参考文献

宮野公樹『学問からの手紙』小学館、二〇一九年。
宮野公樹「専門とは何か。」『京大アカデミックデイ二〇二三』発表資料 http://hdl.handle.net/2433/285084（二〇二五年六月三〇日アクセス）。
宮野公樹『問いの立て方』ちくま新書、筑摩書房、二〇二一年。
カール・ヤスパース（草薙正夫訳）『哲学入門』新潮文庫、新潮社、一九五四年。

Academic Knowledge:
The Relationship between "Gakumon" and "Kenkyu"

This paper distinguishes "gakumon" (learning/scholarship) from "kenkyu" (research). While research explains facts, "gakumon" is the creative act of expressing one's profound impressions, akin to creating art. The prevailing confusion between these terms in academia is problematic. Universities, meant for "gakumon," increasingly prioritize "useful" research, leading to evaluations based on efficiency rather than deeper inquiry. The author argues that research gains meaning only when paired with "gakumon"—asking fundamental questions like "what is useful?" Without this, research becomes self-serving. They advocate for universities to rediscover "gakumon," where individual research contributes to a broader quest for understanding.

宮野公樹 | Naoki MIYANO
京都大学学際融合教育研究推進センター
学問論、大学論
准教授